



**まちなかにあふれる
笑顔とおもてなし**

世界各国からやってきた来訪者を迎えたのは、市民の笑顔と賑わいを創出する空間だった。

まちなかにはラグビーワールドカップをモチーフにしたシティドレッシングが施されていた。May J.さんの歌う「NO SIDE」が流れ、10月6日～14日には自動運転車両が大分きやんバスのルートを巡った。

大分城址公園では日本文化の発信をテーマに、海外からの来訪者に楽しんでもらえる体験型のイベントを行った。「おおいた食と暮らしの祭典」では日本庭園のライトアップや錦鯉の展示を、「府内城フェスティバル」では22台の山車が集まってお囃子を演奏した他、書道やお茶、山駕籠の体験ブースも登場。多くの人が訪れ、日本文化に触れる機会となった。

「宗麟公まつり」、「中央通り歩行者天国」、「スポーツ・オブ・ハート」、「おおいた夢色音楽祭」などといった地元のイベントに自然に溶け込む国内外からの来訪者。期間中のまちなかには多くの人で賑わった。



**2020年へつながる
レガシー**

大分市は公認チームキャンプ地として、ウルグアイ東部共和国、フィジー共和国、フランス共和国の代表3チームを迎えた。

ウルグアイ代表は、大分市でのキャンプ期間中、市内の中学生との交流イベントを行ってくれた。当日は生徒がウルグアイ国歌斉唱でチームのメンバーを迎え、ウルグアイ料理を囲んで交流を深めた。フィジー共和国は、東京2020オリンピック・パラリンピックの事前キャンプ地としても大分市を選んだ。これまでの交流や、ラグビーワールドカップに向けて整備した練習施設、今回のキャンプにおける大分市のおもてなしなどが評価された結果であろう。その記者会見の場で、フィジー共和国大使は大分市への感謝の言葉を伝えてくれた。準々決勝を大分で行ったフランス代表の応援に駆け付けた駐日フランス大使は、試合観戦前に市内を視察した。後日送られてきた感謝状には、「大分市への訪問が素晴らしい思い出となった。試合の数時間前から祝祭の広場が盛り上がりを見せていたことを嬉しく思う」と綴られていた。ラグビーワールドカップを通して数々の経験は、未来へとつながるレガシーになるに違いない。

①笑顔で写真に写るサポーター ②府内城フェスティバル2019 (10/19) ③府内城フェスティバル2019で書道体験をする海外からの来訪者 (10/19) ④第4回おおいた食と暮らしの祭典 (10/1～20) ⑤おおいた夢色音楽祭2019 (10/19・20) ⑥インフォメーションセンターで案内をする大分市市民ボランティア ⑦スポーツ・オブ・ハート2019 in OITAで「NO SIDE」を披露する歌手のMay J.さん (10/12) ⑧大分大学医学部書道研究会の学生との交流会を通して日本文化に触れたフィジーの大学生 ⑨中学生と交流したウルグアイ代表チームの選手 ⑩駄原総合運動公園球技場で練習をするフランス代表の選手 ⑪滝尾中学校の生徒と交流したウルグアイの中学生